

# 『女殺油地獄』

— 地獄と業

太田貴之

## 一 はじめに

死生について考えるということとは、死を捉えよう、理解しようとする営みの一部を為すものであるかと思う。またその一断面として、人を殺す、人に殺されるという事態を如何に捉えるかという問いも出てこよう。即ち殺人の是非を問うという形ではなく、人が殺し—殺されることの意味についての問いである。そして殺し—殺されることの意味を問うその時には、我々は抽象的な殺人について論じるのみならず、個々の事例に立ち返ることを要請される。

近世の劇作家近松門左衛門（承応二—享保九 一六五三—一七二四）の描く世話物浄瑠璃もまた、このような問いの下に書かれたものではないか、と論者は考える。その理由は近松作品において、殺し（特に心中）が阿弥陀仏による救済として意味付けられているからだ。例えば『曾根崎心中』における「未来成仏疑ひなき恋の手本となりけり」という結びの一節や、『心中天の網島』における「弥陀の利剣とぐっと刺され」という言葉からもそれは裏付けられよう。心中する男女は、恐らく現実においては惨めな落伍者であった筈だ。しかしその落伍者こそが阿弥陀の救いに最も近い存在なのであり、近松作品を享受する者にとつての「回向の種」（『曾根崎心

中」となる。殺し—殺される関係が当事者にとつての救済となり、また救済を求めるといふ同一の立場において当事者と享受者が通低する—このような構造を近松作品の基底と見なすことは可能だろう。

近松作品をこのように捉えた上で問題となるのが、本稿において取り扱う『女殺油地獄』である。放蕩無頼の不良青年河内屋与兵衛が借金に追い詰められ、隣家の人妻お吉—彼女は与兵衛の理解者であつた—を殺すといふこの話に、我々は与兵衛やお吉の救済を見ることは出来ない。印象のレベルで言えば、与兵衛によるお吉殺しは不条理で自分勝手で、ただただ凄惨なばかりである。お吉殺しの場面が現出させているものは極楽浄土（阿弥陀仏の救済）ではなく、「赤面赤鬼」「邪見の角」「身を裂く剣の山」といふ世界—まさに「地獄」ではない。

かつて『曾根崎心中』において男女の情死を救済として美的に描いた近松が、何故晩年において男が女の肌刃物を突き通すという行為を「地獄の苦しみ」という形で描かねばならなかつたのか、というのが本稿の問題関心である。換言すればそれは、『女殺油地獄』を近松世話物の中でも異質な作品であると捉えた上で、その位相を明らかにすることになるであろう。また内容に即するならば与兵衛とお吉が殺し—殺される関係において救済されない根拠を、何処に見出すかという問いでもある。

この『女殺油地獄』を異質なものと認めた上で、近松作品における位置付けを行おうとする試みには、既に先行する研究が存在する。例えば広末保は、『心中天の網島』（この作品は『女殺油地獄』の前年に発表された）を世話悲劇の頂点と捉え、『女殺油地獄』は世話悲劇からの別の方向への発展、即ち「行為による葛藤の必然的展開」を放棄し、「現実の悪矛盾を凝視」することで得られた近松の「リアリズムの到達点」である、と位置付けている。成る程確かに「殺さるべきどんな筋合いもない」お吉が「劇的展開の必然」から離れて殺されるこの作品は、「悲劇的な感動」を描いているというよりも、悪矛盾に満ちた現実を描写しているという評価が相応しいように思われる。<sup>1)</sup>

一方白方勝は『女殺油地獄』を「心中天の網島」から後退した作品とするのではなく、より積極的に「義理の悲劇」を描こうとした作品として捉えようと試みている。即ち義理を直接的な悲劇の要因としている「心中天の

網島」までの立場から一転し、『女殺油地獄』では「義理というモラルの限界」を認識し「義理に内在する非人間的な悪」が引き起こす悲劇を描いている、と分析したのである。この時お吉殺しは「義理そのものの矛盾、欠陥」を暴く方法の一部として位置付けられる。<sup>(2)</sup>

広末・白方両氏の分析は、『女殺油地獄』を悲劇と捉えるか否かでは異なるものの、これを矛盾の描写として捉える点では一致している。つまり『女殺油地獄』の主題は現実世界における矛盾の描写、乃至暴露であって、矛盾の収束点としてお吉殺しが成り立つという構図になる。この作品が「超近世的、むしろ近代的」<sup>(3)</sup>と評価される所以も、上演当時より近代以降に高い評価を受けたという背景だけではなく、この矛盾を孕んだ現実を観察し描写し得たという解釈に由来するのであろう。

しかしこれらの分析が、お吉殺しという事態において近松が描こうとしていたものと、真に一致するかと問われれば、論者は必ずしも首肯出来ない。その根拠は、お吉が殺される理由についての以下の言辭にある。

千々の病は避くれども。過去の業病逃れ得ぬ。

お吉が与兵衛に殺された理由を、近松は業だと言う。自分が作った業の報いは自分が受けなければならぬ。これは裏を返せば、他の誰かの業の報いを自分が受けることはないということでもある。つまりお吉が殺される理由である「業病」は、お吉以外の誰か（例えば与兵衛）の業であることは出来ない。お吉はただ自らの業の帰結として殺されるのである。この一点からしても、近松がお吉を「殺さるどんな筋合いもない」（広末）とは考えていないことが明らかになる。つまりお吉が殺されることは必然以外のなものでもなく、それが広末氏の言うように「行為による葛藤の必然」の様相を呈していないとするならば、それは近松が行為とは異なるレベルの必然を描いていたということの意味するのだ。

更に与兵衛がお吉を殺す理由についても見てみよう。こちらはお吉殺しが露見した後の、与兵衛の大音上げの

中に確認が出来る。

思へば二十年來の不孝無法の悪業が。魔王と成つて与兵衛が一心の眼を昏まし。

お吉自らの業に因つて殺されるのと同様に、与兵衛がお吉を殺すのもまた自らの業に因る。不孝無法の悪業は与兵衛自らのものであつて、人一般の業ではない。与兵衛によるお吉殺しは、与兵衛固有の業から導かれるものであつて、一先ずは「義理に内在する非人間的な悪」（白方）という一般論とは區別されるべきである。勿論この与兵衛の業が「義理そのものの矛盾、欠陥」から導出されたものである可能性はあるが、それは与兵衛の業を把握した後に考えるべき問題であらう。

近松の言葉に従えば、与兵衛をお吉殺しに駆り立てたものも、またお吉が与兵衛に殺される理由も業なのであり、『女殺油地獄』のテーマは何よりもまず業であると言う他は無い。本稿の問題関心に遡れば、それは殺し—殺されることで救済されないような業とは何であるかという問題である。与兵衛とお吉は、広末氏の言うように「劇的展開の必然」によつて殺し—殺されているとは言えない。しかしその背後には、彼らが救済され得ないことの必然性が、何らかのかたちで描かれているはずである。言うなれば、「劇的展開の必然」を超えたレベルでの必然、在りようの必然的帰結として、与兵衛のお吉殺しが導出されているのである。

本稿が選択する業と救済という観点から『女殺油地獄』を分析する手法については、直接の先行研究としては、高島元洋のものが挙げられる。そこで本論に入る前に、高島氏の分析を確認しておこう。『女殺油地獄』は、同時期の作品である『心中天の網島』との比較で語られることが多いが、高島氏はこれを『曾根崎心中』との対比において把握している。氏は「近松において、業とは人と人とのそれぞれの繋がりが避けえない絶対であることを意味」とした上で、『曾根崎心中』では徳兵衛とお初が「業」という必然に従うのに対し、『女殺油地獄』では与兵衛とお吉は「業に支配され」「お吉は、その逆説的な業から逃れようとし、一方与兵衛は盲目的に操られて

いる」と対比した。「業に従う」と「業に支配され」とは同一の事態にも見えるが、業が人と人との繋がりと捉えられる時、業に従うことは二人の「繋がりのなかの心情を感じ」させる為に「美し」くなるが、業に支配される時は二人の「心情が十全とな」っていかない為に「不気味と感覚される以外のいかなる感覚への訴え」もないという点に差異がある<sup>(4)</sup>。

高島氏の分析は、享受者の感じ方の差異を、業に対する当事者の自覚の違いから説明しようとするものであるから、本稿の関心とは完全には一致しない。しかし、業が人と人との必然的繋がりにあるという指摘に関しては、本稿の行論に大きな見通しを与えてくれる。即ち与兵衛とお吉はお互いの繋がりの必然性に無自覚であつた為に、彼ら二人が現出し得たものは、救済ではなく「地獄」でしか有り得なかつたということになる。逆から言えば「地獄」とは業に対して無自覚な者達の世界、乃至は業を自覚するという主体的な営みを行えない者達の世界である。「女殺油地獄」のクライマックスで溢れ出す「油の地獄の苦しみ」は、お互いの繋がりに無自覚であらざるを得ない、与兵衛とお吉の在りようが必然的に導出した結末だと言える。

このように捉えれば、「女殺油地獄」が三つのレベルで描かれていることがわかる。つまり一つ目に与兵衛とお吉の繋がりの描写、二つ目にその繋がりに無自覚である両者の描写、そして最後に無自覚でしかあり得ない与兵衛の在りようの描写である。勿論この三つが上中下巻に綺麗に配分されているというのではなく、各巻において錯綜しており、分量についても、与兵衛の在りように関する描写が作品のほとんどを占めている。故に私見で展開を再構成するよりも、近松の展開に従いながら行論をすすめた方が得策であろう。

## 二 上之巻

上之巻においては、与兵衛とお吉の繋がりと、与兵衛の在りようが野崎参りという場面において描かれる。野崎参りとは毎年四月上旬に行われる、大阪慈眼寺の野崎観音への参詣であり、救済に関わる空間である。劇中与兵衛とお吉の繋がりが、この観音の磁場とでも呼ぶべき場所から始まっていることは注目してよい。更に野崎参

りの冒頭には「昔在靈山名法華。今在西方名阿弥陀。娑婆示現觀世音。」という句が挟まれている。元々の偈文ではこの後に「三世利益同一體」と続き、「釈尊と阿弥陀と觀音が過去・現在・俗世において衆生を救う同一體である」という意味になるが、この偈文を挟むことによつて、野崎参りが直接に釈尊や阿弥陀といった仏や如来に關する空間であることが明示される。

しかし不良青年である与兵衛は、当然のことながら「信心の觀音参り」に来ていたのではない。彼の目的は、自分を振っておきながら、会津の田舎客に揚げられた馴染みの遊女小菊を捕まえることにある。無論そんなことをすれば、客と揉め事になるであろうことは与兵衛も理解している。しかし「田舎者に仕負けては此の与兵衛が立たぬ」と考える与兵衛は、ここでおめおめと引き下がるわけにはいかない。そこで彼は、不良仲間を引き連れたの「喧嘩師のら参り」に來た訳である。

お吉におだてられると、ついつい自分からこんな話を始めて、結果的にお吉に異見される――年上の人妻の掌の上で転がされる、そんな他愛も無い一面を見せながら与兵衛は我々の前に登場する。お吉との遣り取りやその内容から見ても、与兵衛には喧嘩師や悪所通いといった良俗に反するところはあるものの、根っからの悪人としては描かれていない。金に飽かせた田舎客に、馴染みの遊女を奪われるのが癪に障ることは理解出来るし、遊女との恋におれの一分を立てようとする姿勢については好感すら持てる。だがこの遊女との恋は、後の小菊の対応から見ると、どうやら与兵衛一人の早合点のようだ。

与兵衛一行に見つかつた小菊は、与兵衛をおだてて場を取めようとするが、その対応は惚れた男に対するものではなく、接客上の通り文句に過ぎない。与兵衛は自分を小菊にとつて特別な男だと思つていようだが、小菊にとつて与兵衛は会津の田舎者同様、ただの客でしかないのである。同じ客なら羽振りの良い方に付くのは、遊女として至極当然のことである。

しかし、小菊のような金で動くタイプの遊女が登場するのは、近松作品においては珍しい。これについては「近松世話物の主人公の馴染みの遊女は、何れもみな誠を尽くす者ばかりであつたが、ここに初めて男に熱中しな

いその場限りの女を登場させた<sup>(5)</sup>という藤野義雄の、誠であるか否かという区分が簡潔にして充分であろう。しかしこれは小菊が他の作品の遊女に比べ、元から格段に薄情だからというような理由によるのでは無い。「曾根崎心中」のお初にせよ、『心中天の網島』の小春にせよ、遊女は本来誠たりえない。しかし誠たりえないはずの遊女の誠を、心中物の主人公たちは引き出すのである。つまりここで現れる差異は遊女の差異ではなく男の差異であつて、小菊の口先にまんまと乗せられ「伸びた顔附」になつてしまふ与兵衛では、遊女の誠を引き出すには少々荷が重いということの意味するのだ。

小菊に体よくあしらわれる与兵衛は、心中物の主人公たちと異なる在りようをしている。その違いは遊女に対して誠であるか否か、より平たく言えば恋に熱中しているか否かであろう。小菊が与兵衛に熱中していないのと同様に、実は与兵衛も小菊に熱中しておらず、どこかしら醒めている。少々長くなるが根拠として与兵衛の言葉を引きおこう。

残多いあつばれ今日は物の見事なことで。参りの群集に目を覚させようと。此の中から蹴いたれど備前屋の松風めは先約が有つて。貰ひも貸しもならぬとぬかす。天王寺屋の小菊めは野崎へは方が悪い。どなたの御意でも参らぬといひ切る。

与兵衛が遊女を連れて歩きたいのは「参りの群集に目を覚させ」たいが為である。またその相手も、小菊でなければいけないというわけではなく、松風という別の遊女でも構わないのである。要するに彼が求めているのは小菊そのものではなく遊女一般であり、遊女を連れて野崎参りをするということ自体に価値を見出しているのである。悪所通いに散財しながらも、与兵衛は遊女との恋という非日常の世界に嵌まつてはいない。遊女と心を通わすことを欲しているというよりも、日常の側から遊女と心を通わしているように見える自分を欲しているのだ。「群集」という日常からの視線と評価を意識しながら、敢えて良俗をはみ出た非日常の地点に自分を置こうと

する与兵衛は、要するに見栄つ張りで目立ちたがりなのである。虚栄に振り回されながら、それを自分の本心であると思ひ込んで、不良青年として立ち回っている——与兵衛の在りようは一先ずこのように押えられるであろう。

しかし与兵衛には、見栄を貫徹する程の度胸も無い。会津客との喧嘩の拍子に代参に来ていた小栗八弥の衣服に泥をかけてしまうと、先刻までの威勢はどこへやら、「アアお侍様怪我でござる御免なませ。お慈悲お慈悲」と命乞いをする。勿論太平の時代とはいえ相手は帯刀した武装集団なのであるから、この命乞いをもって与兵衛が人一倍臆病であるとする訳にはいかない。しかし与兵衛の中に、虚勢に自らの身命を預け、虚勢を貫く為にはいかなる秩序や権威にも徹底的に刃向かおうという程の精神がないことは確認できる。一方で反良俗的な見栄を張りながらも、抜き差しならない状況においては途端に卑屈になる与兵衛の在りように、何かしら一貫したものを見出すことは出来ない。或いは状況によって言動がころころと変化する、一貫性のない人物という点において与兵衛の在りようは一貫しているとも言えるであろうが、一貫性がないということで一貫しているということの内実を把握する為には、もう少し本文を読み進める必要がある。

小栗八弥一行には、与兵衛の実の伯父森右衛門が同道していた。主人に無礼を働いた慮外者が肉親だとわかった森右衛門は、「甥と見たれば猶助けられぬ。討つて捨つる」と一層態度を硬化させるが、八弥の機転によって一先ず与兵衛は命を助けられる。森右衛門から「下向には首を討つ」と言われ、与兵衛はこれ以上ないほどに動揺し、伯父の逃げろという合図にも気付かない。自らを振り回す虚栄が一旦取り払われれば、与兵衛は「切られたら死なう。死んだらどうしょ」とただただ右往左往するばかりである。この窮地において「地獄の地蔵」としてお吉が再び登場する。

突如目の前に現れたお吉に、与兵衛は「地獄の地蔵」を見て縋りつく。野崎観音の参詣において、お吉が与兵衛の地蔵として現れることは、二人の繋がりの意味をほぼ明らかにするであろう。即ち二人の繋がりには救済に関わる繋がりであり、お吉は与兵衛の救済者である。そもそもこの野崎参りの以前から、お吉は与兵衛の理解者であり寛容に接していたらしく、与兵衛も「間がな隙がな入浸つて」いるところを見れば、この人妻には心を開い



ていたようだ。

しかし不良青年と人妻の交際と聞けば、どうにも艶めいた印象を持たざるを得ない。ましてやお吉は「柳腰柳髪とろり渡世の種油」「見返る人も子持とは見ぬ花盛」という美貌の持ち主であり、与兵衛の友達皆朱の善兵衛によれば「物腰もどこやら恋の有る美しい顔」をしている。ただ当のお吉本人は、自らの容姿に頓着した様子は無く、泥まみれの与兵衛に呆れながらも、「親御達の病に成るがいとしほい」「茶屋の内借つて振濯いで進ぜましょ」と二人して茶屋の内に入っていく。後に夫の七座衛門が非難するように、この時のお吉の行動は「尾籠至極疑はしい」「不義密通と取られても致し方ない軽率な行動である。しかしお吉自身は微塵も後ろめたい様子を見せることもなく、夫の声が聞こえると「子供がお昼の時分も忘れ。どこに何してゐさしやんした」と逆に夫に愚痴をこぼす。更には夫に出発するよう促されると、「オオオオ待つてゐました委しい事は道すがら」と与兵衛を顧みることもなく出て行く始末である。お吉は夫の嫉妬にも、与兵衛との不義の可能性にも囚われず、ただただ無邪気に実直な妻として、また寛容な隣人として、何の屈託も無く振舞っている。

恐らくはこの無防備さ、無邪気さが、与兵衛がお吉に心を開く理由の一つなのであろう。しかしこの無意識、無自覚の内に男を惹き付けてしまうお吉の在りようは、実は自覚的に男を惹こうとする妖艶な人妻より遙かに性質が悪い。事実与兵衛も、口では「所帯染うで気がかうたう」「見かけばかりで甘味のない。鉛細工の鳥」とお吉を揶揄しながらも、結局のところお吉に惹かれ、彼女のところに「間がな隙がな入浸つて」いるのである。お吉は無防備さ故に与兵衛を受け入れ彼の救済者となるが、同時にその無防備さ故に与兵衛に繋がりを自覚することを許さないのである。

お吉は不義の香りを残しながら、与兵衛をおいて去っていく。「一人茶屋の見世」に取り残された与兵衛は、事態をのみ込めずに「とほんとして」、この擬似的な不義を救済の可能態として記憶に留める。与兵衛とお吉の繋がりが現実の不義となつた時、そこにお吉が与兵衛を救い、与兵衛を救うことによつてお吉が救われる——二人の救済が現実のものとなるであろうことが、与兵衛の記憶の裡に刻み込まれる。ここに与兵衛のお吉殺しの伏線が張ら

れるのだが、これについては下之巻の分析にて詳述することとしよう。

節を終えるにあたり、上之巻をまとめておこう。与兵衛とお吉の関係は、救済というレベルにおける繋がりである。しかし二人はともに、この繋がりを自覚していない。お吉はその無邪気さ故に不義の可能性を自覚せず、与兵衛もまた、お吉が無防備であるが故に不義の可能性に気付かない。お吉が余りに無防備である為、自分がお吉に惹かれていたことすらも、恐らくは自覚し得ていない。その一方で彼は見栄を張りたいたが為に、大して興味も無いのに、遊女の手練に騙されて小菊の尻を追っかける。与兵衛は自らの本心を自覚することなく、状況に振り回され続けている。果たして彼は何故このような在りようをしており、また彼のこのような在りようはどのようにしてお吉殺しという結末に至るのか―これを描いているのが、続く中上之巻である。

### 三 中上之巻

中之巻においては与兵衛の性格を生み出した家庭と、その家庭が与兵衛をお吉殺しへと追い詰めていく様子が描かれる。言うなれば与兵衛の在りようを軸にして、過去を紐解く描写と未来へ繋がる描写の両方が描かれる巻が中之巻である。

最初に与兵衛の家庭の事情について述べておこう。彼の実父である先代徳兵衛は既に他界しており、現在の父親徳兵衛は義父である。徳兵衛は先代の「下人筋」にあたり、与兵衛は親方の子にあたる為、徳兵衛は万事与兵衛に遠慮する。母のお澤は実母であるが、継父に与兵衛を可愛がってもらいたいが為、敢えて与兵衛に辛く当たる。兄の太兵衛は既に独立して順慶町で商いしており、与兵衛と違い実直な商人で、徳兵衛の遠慮がちな態度が与兵衛を増長させていると非難する。最後に妹のおちだが、彼女は兄二人と違って徳兵衛の実子で、近く婿を取ることになっているが、ここ十日ほど病み伏している。

以上四人に、上之巻で登場した母方の伯父森右衛門を加えた五人が与兵衛の親族となるのだが、一見しただけで主従関係と親子関係が逆転した複雑な家庭事情が伺え、このような家庭で育った与兵衛が「ごくだう」になる

のも、当然であろうとの印象を受ける。またそれと同時に、与兵衛の「ごくだう」ぶりが、より一層この家庭の事情を複雑なものにしている。

「親御達の病に成るがいとしばい」という上之巻のお吉の言葉にもある通り、与兵衛の放埒ぶりは徳兵衛とお澤の悩みの種であった。中之巻の冒頭でも、野崎参りの一件によって、森右衛門が浪人となったことが兄太兵衛の口から告げられる。後のお澤の言葉に「内でも外でもおのれが噂ろくな事は一度も聞かぬ。其の度毎に母が身の肉を一寸づつ。削いで取るような因果晒し」とあるように、与兵衛はそこかしこで面倒を起こしては、両親に肩身の狭い思いをさせていたようだ。更に与兵衛は「一匁儲ければ百匁遣う根性」で悪所通いに散財する。このままいけば与兵衛は、近い内に「獄門柱の主」になるであろうことは目に見えている。そこで徳兵衛が編み出したのが、おかちに婿を取って名跡を継がせると与兵衛に言つて、彼の反省を促そうという計略であった。

しかし不良息子の更正に、ここまで芝居がかつた行動が必要であろうか。こんなことをする以前に、太兵衛の言うように「拳一つ」あてるなり、「酷い主に掛け矯直」すなりの手段を取るべきであろう。しかし「二人の子供に心を尽すは皆古旦那への奉公」と考える徳兵衛にはそれが出来ない。お吉や与兵衛の友人に異見を頼んでいるところからすると、口での説教すら遠慮しているようである。そこで苦肉の策として徳兵衛が取つたのが、この婿取り話なのであるが、結果としてこれが与兵衛をお吉殺しに駆り立てていく端緒となるのである。

妹が婿を取ると聞かされて与兵衛が「口惜しと恥入り。根性も直る」わけもなく、今度は与兵衛がおかちを利用する。与兵衛は妹おかちに死んだ先代徳兵衛の霊が憑いたふりをさせ次のように言わせる。

おかちが病直すには婿取の談合止めてたも。あの与兵衛が若氣故借銭に責めらるる。其の苦しみが冥途の苦患是ぞ呵責の責と成る。流れ勤めの女子なりとも。与兵衛が契約の思ひ人を請出し嫁にして。此の所帯を渡してたも。

与兵衛してみれば、自分は主筋の子で、おかちは下人筋の子である。家督を継ぐのは自分の当然の権利であるのに、今徳兵衛は実子可愛さの余りこれを侵害しようとしている。恐らく与兵衛の目にはこの「婿取の談合」が、徳兵衛一族による家督篡奪計画と映ったのであろう。故に与兵衛は徳兵衛を「道知らず」と罵倒し、対抗手段として先代の権威を振りかざすのである。

しかし先代への義理を第一に考える徳兵衛に、家督を与兵衛から奪おうという意図など毛頭ない。寧ろ「可愛さは実子一倍」なのであり、彼はただ与兵衛に「一勳稼ぎ五間口七間口の門柱の主にと念願を立てて」欲しいだけなのである。先代への忠義と与兵衛への愛情が重なり、徳兵衛は与兵衛の物質的な繁栄と不足なき生活を願わずにはいられない。他方与兵衛も、義父徳兵衛が心底憎いわけでもないし、親の願う自らの物質的繁栄を拒絶しているわけでもない。与兵衛は仮病事件に協力して貰う為、おかちに「それからは商も精出し。親達へ孝行尽し逆ふまいとの誓文立」をしており、一方では親への孝行を求めている。勿論この言葉がどこまで本気かは甚だ疑わしいが、少なくとも今の自分が「親の病」となっていることは熟知しており、そのことに対する後ろめたさは感じてゐるようだ。

大まかに切り取ると、ここまでが与兵衛の在りようを軸に、『女殺油地獄』の背景を描いた箇所である。徳兵衛は与兵衛に対し万事において遠慮がちで、与兵衛の現状に不満を持ちながらも、結果的に与兵衛を甘やかし許してしまふ。与兵衛もまた放蕩な自分に後ろめたさを感じながらも、甘やかされることでそれを許容してしまふ。この甘やかしの構造に、与兵衛が「ごくだう」のままであり続ける根拠が見出せるであろう。

甘やかされ許されるということは、裏を返せば一人前と見做されていないということである。与兵衛はまだまだ未熟な子どもだという認識があるからこそ、甘やかし許容するということが成り立つ。与兵衛は未熟であるから放埒なのであつて、本質的に悪人なのではない。故に与兵衛には改善の余地がある——これが徳兵衛とお澤の抱えている与兵衛像である。与兵衛は「獄門柱の主」の可能態であるのと同様に、「五間口七間口の門柱の主」の可能態でもある。

また与兵衛が未熟者であるという認識は、与兵衛自身も持っていたらしく、自らの借金の理由を「若氣」と捉えている。与兵衛は自らの一生を悪徳に委ね続けるつもりもなければ、そんな度胸も無い。しかしこのような「若氣」という自己認識からは、与兵衛の反省が生まれてくることはない。お澤が後に言う通り「その甘やかしが皆毒飼」なのである。

またこの甘やかしの構造は、与兵衛内部からの反省を導き出さないという以上の問題をその根元に抱えている。「あいつが顔附背格好成人するに従ひ。死なれた旦那に生写し」とあるように、徳兵衛は与兵衛に先代の影を投射している。その結果与兵衛が未熟であるという認識が、与兵衛自身の在りようとはまた別に、先代との比較によって行われる。より強く言うならば、徳兵衛にとって与兵衛は先代の写像に過ぎない。徳兵衛の視線が与兵衛に向かう時には、常に与兵衛を通り過ぎて先代に焦点がある。徳兵衛の意識においては、自分が与兵衛にとつて先代の代わりである以上に、与兵衛が自分にとつての先代の代わりなのである。このような徳兵衛の視線の中で彼が「与兵衛を立て」る為には、どうしても父親と違う形、「義理堅い」「かうたう」な在りようとは違う在りようを示すことで、自らに焦点を合わせねばならない。

与兵衛の見栄っ張りで反良俗的な在りようは、自らを通り過ぎる徳兵衛の視線に淵源する。「若氣」と訣別する為には非日常の世界で「与兵衛を立て」ねばならない。しかしそれが「若氣」故の反抗だと与兵衛自身が感じている故に、彼は非日常に殉ずる度胸を持ち得ない。甘やかしから脱出する為の行動が、更なる甘やかしを生み、一層「与兵衛を立て」ることから遠ざかってしまうという悪循環の中に与兵衛はいる。貫くべき自分の本心も見えず、ただただ状況に振り回され可能態の枠内に留まり続ける―そしてそれが許されてしまう世界に彼は身を置き続ける。

しかしこの悪循環が直接にお吉殺しへと繋がる訳では無い。悪循環はまさに循環であるからこそ、一定の平衡を保ち続ける。悪循環がお吉殺しに至る為には、一旦循環が破綻せねばならない。すなわち与兵衛の勘当である。「婿取の談合」に対して与兵衛は先代の権威を使って反抗した。恐らく与兵衛に深い意図はなかったのであろう

が、これが徳兵衛には堪えた。自分は「死んだ人の跡式取らいでも。五人七人はゆるりと過ぐる術知つたれど」、「其方が家を見捨てては後家も子供も路頭に立つ」という森右衛門の「段々の頼み」故にお澤と再婚したという自負が、徳兵衛の中にはある。自分が現に今妻子を養っている以上、先代を「地獄へ落とし」たなどと――少なくとも養われている当の本人と兵衛にだけは――言われる筋合いはない。しかし一方で徳兵衛は兵衛を先代と重ねているが故に、この馬鹿げた企みを「鈍な評定」とあしらうだけの余裕も無く、「よつぱどにはたえあがれ」と感情を露にする。

徳兵衛の感情の噴出に兵衛はたじろいだのであるうか、彼は徳兵衛を「俯向に踏みめら」す。兵衛は常々親を騙して遊ぶ金をせびっていたようだが、親を足蹴にしたのはこれが初めてだったと思われる。少なくともそう考えなければ、「いかな下人下郎でも踏むの蹴るのはせぬこと」というお澤の言葉に滲み出る驚愕と絶望が見えてこない。また兵衛の理解者であつたおかちも、こればかりは見かねて兵衛の企みを暴露して父親を庇う。兵衛はますます動揺し、おかちをも踏みつける。

兵衛の暴力は相手を殺そうとする、生死をかけた武力の發揮ではない。踏んでも蹴つても相手が自分の命を奪う為の反撃はしてこないし、自分もまた親を殺すつもりはないという前提の下で振るわれる腹癒せの暴力である。言つてしまえばこの家庭内暴力も、徳兵衛の甘やかしの構造の枠内にあり、悪循環の一部に過ぎない。しかしこの場に母親が登場することで、河内屋一家の悪循環は終わりを迎える。

お澤は兵衛が徳兵衛を踏みつけているのを見るや否や「兵衛が髻引掴んで」「目鼻もいせぬ握拳」を食らわせる。徳兵衛が先代を持ち出されて感情が噴出したように、お澤も兵衛が徳兵衛に暴力を振るうのを見て感情を噴出させる。お澤には徳兵衛に兵衛を可愛がつて貰いたいという強い気持ちがあり、徳兵衛の愛情が兵衛に向かうように意識して振舞ってきたのである。「たとへあの悪人めお談義に聞くやうな。周利槃特の阿呆でも阿闍世太子の鬼子でも。母の身でなんの憎かろう」と後に言うように、お澤は徳兵衛と違い兵衛が「道楽者」であることよりも、家庭の中で所在無い思いをさせることの方が心配だつたようだ。しかし今日の前の兵衛は、

よりにもよつて自ら進んで徳兵衛を踏み付けている。お澤は徳兵衛の妻として、また与兵衛の實の母親として、「思切つて」彼を勘当せざるを得ない。

しかしお澤の「一家一門皆侍。その習はかしか思切つては見返らず」という性情は、徳兵衛とはまた違う次元で与兵衛を甘やかしていた。即ち「思切」った時の行動が苛烈である反面、「思切」りの閥値に達するまでは行動を起こさず、与兵衛を許容してしまう。先日「山上参りの行者講のと」騙されて「四貫六百」与兵衛に与えておきながら、森右衛門から頼まれたと言われればまたしても騙されるあたりからも、そのことは伺えよう。お澤は一貫して与兵衛を可愛いと思つているが「思切つては見返らず」の性情故に、その対応は極端から極端に振り切れる。お澤の口から勘当という言葉が出た時、おかちや徳兵衛は一瞬躊躇するが、彼女は率先して与兵衛を追い出そうとする。与兵衛の勘当は家庭の誰もが納得した結末としてではなく、お澤の激情によつて成された事態である。

河内屋一家の悪循環はおかちの婿取りと仮病という二つの狂言事件によつて終焉を迎える。しかしそれは、悪循環が限界に達したが故の破綻ではなく、母お澤の激情によるものであった。甘やかしの構造は何一つ変化することなく保存されたまま、与兵衛は勘当される。甘やかしの構造の中に居続ける与兵衛には、自分が何故家から追い出されなければならないのかを理解出来ない。お澤と徳兵衛の感情が何故昂ぶつていくかを理解できずに、ただ動揺し焦つている。「半時も此の内に置くことならぬ勘当ぢや出て失せう」と言われて、いけしゃあしゃあと「此の与兵衛が爰を出て何処へ行く所がない」と答えられるのも、自分のしたことが如何に徳兵衛とお澤にとつて「悲しい」ことであつたかを理解できない為であろう。結局のところ与兵衛が出て行くのも、「うちうちひろがば町中寄せて追出す」とお澤に言われた為、町中という權威に恐れをなしただけであり、自分の行為が何であつたかを理解した為では無い。

お澤と徳兵衛は涙ながらに自分の悲しさを伝えようとするが、与兵衛にその悲しみは伝わらない。徳兵衛の自負もお澤の内の高潮も、元来与兵衛の与り知らぬことであるから無理もないのだが、それをわかろうとする姿勢すらないのが与兵衛の在りようの特徴でもある。与兵衛は自らの本心を捉えきれず、状況に流され続ける。そし

てその在りようを自らが未熟であるという認識によつて正当化している。彼には本心が叶わぬことによる悲しみが無い。何かを求めて満たされなくても、それは全て自分が未熟であるが故の不満でしかない。与兵衛は嘆くことが出来ないのである。

#### 四 下之巻

これまでで既に与兵衛とお吉の繋がりと、与兵衛の無自覚でしかあり得ない在りようが描かれた。即ち与兵衛は嘆くことが出来ない男であり、与兵衛とお吉の関係は救済されるものと救済するものの繋がりである。下之巻では与兵衛とお吉の繋がりの無自覚が描かれる。いわば何故嘆きの無い男は救済されないのか、その根拠を描いた巻となる。

下之巻はお吉の夫七座衛門が、売掛金の取立てに外出する場面から始まる。行く当ての無い与兵衛が「一生差さぬ脇差」を懐中し豊島屋の中を覗き込んでいると、後ろから声を掛けられる。振り向くとそこにいたのは綿屋小兵衛であった。小兵衛は与兵衛に金を貸しており、その返済期限が今晚五月四日までであることを与兵衛に告げる。この借金は本来二百匁の借金であるが、返済期限を過ぎれば一貫目となり、なおかつ与兵衛ではなく徳兵衛が背負う仕組みになつており、与兵衛の窮状がより一層明らかになる。

今ここで一つだけ前後関係を確認しておこう。与兵衛は綿屋小兵衛と会うよりも前に、脇差を差して豊島屋にいたのであつて、逆ではない。無論劇中の時間軸からすれば小兵衛からの借金は豊島屋に行くより前なのだが、ここでは恐らく意図的に後に配置されている。つまりこの借金を、与兵衛が脇差を懐に豊島屋へ向かつた理由と取られぬように配置しているのである。この点直後の与兵衛の「世界は広し二百匁などは。誰ぞ落しさうなものぢや」という言葉からも、与兵衛がこの時点では豊島屋の金を当てにしないことが裏付けられよう。もし与兵衛が最初から豊島屋の金を奪おうとしているのなら、この独白は意味を成さない。

それでは与兵衛は何故脇差を持つて豊島屋へと向かつたのか。この脇差は「一生差さぬ脇差も今宵鐙の詰りの



分別」とあるように、この日の彼の覚悟の表れである。しかしその覚悟の中身、何を決意したのかは描かれていない。与兵衛は後にお吉に向かつて「自害して死なうと覚悟し。これ懐に此の脇差差しは差いで出たけれども」と言っている。「切られたら死なう。死んだらどうしょ」という男に果たして自害するだけの度胸があるかは甚だ怪しいが、与兵衛の言葉を信じれば、この脇差はお吉を殺す為のものではなく、自害をする為の脇差ということになる。しかし、与兵衛の言うことをそのままに受け入れたとしても、なお疑問は拭い切れない。というのは、何故自害をする為にわざわざ豊島屋に行かなければならないのかということである。無論与兵衛の言葉を、独白も含めて全て嘘と捉え、最初から豊島屋の金を盗むつもりであったと解釈することも不可能では無い。しかしその場合は当然、何故与兵衛は嘘をついたのかという問いが出て来る。

結論から言ってしまうえば与兵衛の覚悟は、何かを決意したのではなく、覚悟そのものである。自らが何をを行うかを決めてきたのではなく、お吉に逢うことで何を行うかを決める覚悟をしたのである。いわばこの時彼は自分が何をするかなど全く決めておらず、お吉の出方次第でどう転ぶかわからない地点に立っている。

ここで上之巻における与兵衛とお吉の関わりを思い出して欲しい。上之巻において与兵衛が陥った窮地は、命の危機であると同時に、「眼も迷ひうるたへ」「方角がない」という何をしていいか、何処に行けばよいかもわからぬ窮地であった。そしてお吉に出逢って「大阪へ連れて行て下され。後生でござると泣き拜」んだ。与兵衛がお吉に縋りつくその時とは、彼女に方角を指し示してもらおうとを求めているのである。与兵衛の覚悟とはお吉を「地獄の地蔵」と信じ、お吉の示す道にただただ従おうとする覚悟である。

この覚悟の瞬間において、与兵衛は救済に限りなく近付いた。自分の生の全体をお吉に委ね、生に自覚的であることを求めたのである。生きながらにして自らの生を規定しきってしまおうという覚悟、この世での在り方を一心に決めて振り回されぬ在りようを与兵衛は選ばうとしたのである。しかし、与兵衛とお吉の救済は、最期まで現実のものとならなかった。それは与兵衛の覚悟が、自らの在りように対する嘆きから生まれたものではなく、お吉に対する甘えから生まれたものだったからである。

与兵衛が豊島屋に忍び込もうとしたその時、豊島屋に現れたのは徳兵衛であった。与兵衛は身を隠し、徳兵衛とお吉の話を立ち聞きする。徳兵衛は「女房が目顔を忍びつい懐へ入れて」きた錢三百を、与兵衛に渡すようお吉に言付け出て行こうとするが、その時今度はお澤が豊島屋を訪れる。お澤は徳兵衛の行爲を「その甘やかしが皆毒飼」と責めるが、その実お澤も徳兵衛と同じく、与兵衛への錢を渡しに来たのであった。

お澤が用意してきた錢もまた、徳兵衛に内緒で盗んだ金である。それが露呈しお澤は「一生夫の錢金文字ひらかな違へぬ身が。子故の闇に迷はされて盗してあらはれた」と言つて「わつと叫ぶ。お吉も「子を持つ者」として二人に同情し、涙を流しながら承知する。

この場面における徳兵衛お澤夫婦には、既に中之巻で見られたような感情の噴出はない。ここにあるのは与兵衛を勘当したことに對する後悔と、彼に對する深い愛情だけである。しかしそれ故に、再びここで甘やかしの構造が再び浮上してくる。徳兵衛とお澤は、勘当してもまだ与兵衛を甘やかすことに未練を感じている。

「親の愁嘆」を立ち聞きして与兵衛の状況は一変する。自分は二度と家に戻れぬという諦めが、自らの生の方向をお吉に委ねようという与兵衛の覚悟を導出していた。しかし与兵衛の窮地は最早窮地ではなくなり、与兵衛の覚悟は揺らぐ。しかしそれでもなおこの時までには、「胸も樞も落とし付け」てお吉の前に与兵衛は現れている。与兵衛はお吉を菩薩だと信じ、親ではなくお吉に甘えようとする。渡された錢を見て「是が親達の合力か」と不遜に言うのも、「長々しい親の愁嘆」という物言いをするのも、両親ではなくお吉に縋りたいが為である。与兵衛の生の方向は、お吉によって示されなければならぬ。お吉から何かを引き出さねば、生の方向は定まらないのである。その為にはここで親に縋り得る自分を、お吉に見せるわけにはいかない。しかしこの与兵衛の覚悟は、お吉の無自覚によって遮断される。

与兵衛はまず「真人間」になる為に「二百匁ばかり。勘当のゆりるまで貸して下され」とお吉に頼む。しかしお吉は「夫の留守に一錢でも貸すことはいかないかな」と拒否する。ならばと与兵衛は「不義に成つて貸して下され」と頼み込む。しかしお吉はすげなくこれも断る。与兵衛は致し方なく全てを洗いざらい話すが、お吉はそ

れでも与兵衛を信じない。

ここにお吉の無自覚性はつきりと浮き彫りになる。ここで与兵衛が求めているものは錢では無い。与兵衛は他ならぬお吉に救って欲しいのであって、自らの生をお吉に指し示して欲しいのである。しかしお吉は与兵衛の覚悟を全く理解していない。自らが与兵衛の救済者であることに、無自覚であり続ける。彼女はただただ拒絶するばかりで、自分が何かをせねばならぬとは全く思っていない。お吉の無自覚さによって二人の救済は可能態に留まる。自らを菩薩と自覚しない菩薩と出逢って、与兵衛は何を思ったであろう。或いは最期の願いとして、此の世の清算と果報を求めたのであろうか。

与兵衛は「邪見の刀」をお吉の肌突き立てる。「今死んでは年端も行かぬ三人の子が流浪する、それが可愛い死にともない」と命乞いをするお吉に、与兵衛はこう言う。

オオ死にともない筈尤も尤も。此方の娘が可愛い程。おれもおれを可愛がる親仁がいとしい。金払うて男立てねばならぬ。諦めて死んで下され。

この言葉は果たして与兵衛の本心であろうか。与兵衛が下之巻において改心したか否かは解釈が別れるところであるが、形式から判断する限りでは、与兵衛は改心したのではないかと論者は思う。即ちお澤が「子故の闇に迷はされて盗してあらはれた」のと同じように、与兵衛もまた「親故の闇に迷はされて盗してあらはれた」のではないかと。改心して親の愛情に応えようとするのが、一方において自らの救済者を殺すことになるが故に、与兵衛のお吉殺しは地獄の凄惨さを現出させるのだとも考えられる。

与兵衛はせめて親の愛情に応えようとした。救いが現実のものとならないとわかった時点で、与兵衛が「男立て」を出来る場所は、そこしか残っていなかったのである。そしてせめてお吉に、自分の「男立て」の一部を担ってもらうことで甘えようとした。お吉は「悩乱手足をがき」「身を裂く剣の山目前油の地獄の苦しみ」の中で

死んでゆく。お吉は菩薩の可能態として、地獄の苦しみの中で死んでいく。与兵衛は「踏みめらかし踏みすべり」「膝節がたがたがつく胸を押し下げ押し下げ」ながらこの地獄から逃れようとする。しかし幾ら逃れたとて、与兵衛の行く先が「沈む来世」であらうことは、彼自身もつともよく解っていただろう。

お吉を殺した後、与兵衛は「此の世の果報」を一瞬でも長く享受しようとする。遊郭に通いつめ、森右衛門が自分を探していると聞けば逃げ回る。森右衛門が彼を「事あらはれぬ先遠国へも落すか」と考えていることも知らずに、「沈む来世」から逃れようとする。しかし、三五日の連夜の日、遂に事が露見して繩に付く。

与兵衛とお吉は何故救われなかったのか。与兵衛とお吉には最初から最期まで救済の可能性が無かったわけではない。ただ救済である筈の繋がりに、二人が無自覚であった。救済に無自覚であるが故に、可能態は可能態に留まり続け、絶対に成就し得ない。与兵衛は辛うじて気付いていたかも知れないが、その気付きも最期には「此の世の果報」に落とし込まれてしまった。嘆かない男である彼には、お吉に自身が救済者であることを自覚させることは出来なかつたのである。

生の全体を生きながらに捉えるということは、繋がりが自覚されていなければならぬ。死ぬべき時に死に、殺すべき時に殺し、殺されるべき時に殺されることが救済であるならば、それは常に「べき」を担保する存在が要請される。それが近松の描く遊女であり、殺されることよって男を救う菩薩なのであらう。そして女が菩薩であることを保証するのが阿弥陀仏なのである。しかし与兵衛とお吉は、自らの手で自らの救済を破棄してしまつた。

与兵衛は最期の高音上げを近松はこう描く。

仇も敵も一つ悲願南無阿弥陀仏といはせも敢へず取つて引敷き。

与兵衛は最期の最期においてなお二人での救済を求めた。しかしそれもまた、救済の可能態の域を出ることはなかったのである。

本文の引用に際しては岩波書店『日本古典文学大系 近松浄瑠璃集上』（傍点はいずれも論者）を用いたが、読み易さを考慮し、表記を改めた箇所がある。

- (1) 広末保『近松序説』（一九六三年、未来社）
- (2) 白方勝『近松浄瑠璃の研究』（一九九三年、風間書房）
- (3) 藤野義雄『近松名作事典』（一九八八年、桜楓社）
- (4) 高島元洋『女殺油地獄』について―与兵衛とお吉の業―（『実存主義』第八五号、一九七八年、以文社）
- (5) 前掲『近松名作事典』

（おおた・たかゆき 東京大学大学院人文社会科学系研究科修士課程）

---

## “Onnagoroshiaburanojigoku”: “Jigoku” and “Gou”

Takayuki Ota

---

The objective of this document is to place “Onnagoroshiaburanojigoku”, one of the writings of Chikamatsu Monzaemon in all of his works. First, there is the structure in most of his works that human beings are saved by “Hotoke”. Compared with these works, “Onnagoroshiaburanojigoku” is different in kind since we cannot confirm such a salvation structure. The keyword of this document is “Gou”, meaning the destiny of relationships between human beings. Awareness of the destiny decides whether a person is saved or not. Yohei and Oyoshi, dramatis characters in “Onnagoroshiaburanojigoku”, are not saved in this sense.

Yohei, written as a contemporary of Chikamatsu, is a rude guy, full of youthful vigor, prejudicial to public morals and pretentious. He is reliant on society and his family, but is not naturally evil. Furthermore, he thinks his behavior will be forgiven because of his callousness and strongly hopes to gain recognition. Of course, he never keeps good communication with others.

Yohei’s inflected personality is caused by his family. Feeling deep affection for him, his parents cannot express it in their complicated environment. As a result, he becomes more rude and hopes to gain more recognition. He tries accosting his parents for money to use for his amusement, but fails and wreaks violence on his father. Finally he is turned out of the house and is near the end of his because debt.

Oyoshi is forgiving and gets along with Yohei. Also, she is a beautiful married woman living next door to Yohei. Yohei opens his heart to her and often visits her. This is a hint that Oyoshi is “Bosatsu” for Yohei – one who will save Yohei. However, she is killed by Yohei because of his debt.

Both Yohei and Oyoshi are not aware of their relationship – savior and saved. Because Oyoshi is not aware that she will save him, she shows intolerance to Yohei in the last scene. Yohei also is not aware that he will be

saved by her, so he kills her.

“Onnagoroshiaburanojigoku” is a story, not a salvation. Even though there is a chance of the salvation of “Amida”, Yohei and Oyoshi lose it because of their non-awareness. In the sense that salvation is just a possibility, Yohei and Oyoshi live in “Jigoku”. Recognizing the whole image of life with living, salvation will change from possibility to realization. This means that we die when we should die, following the relationship between human beings, kill when we should kill and be killed when we should be killed.